

令和2年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」

事業実施報告書

- I スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び
- II マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成
- III スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築
- IV 日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成
- V スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成

学校名【 蒲郡市立蒲郡中学校 】

1 実践テーマ	【 IV・V 】
2 実施対象者	第2学年 5クラス 147人
3 展開の形式	(1) 学校における活動 ① 教科名（ 保健体育・総合的な学習の時間 ） ② 行事名（ 生き方を考える会 ） ③ その他（ ） (2) 地域における活動 ① イベント名（ ） ② その他（ ）
4 目標 (ねらい)	オリンピック・パラリンピック教育推進によって、スポーツの楽しさや価値、共生社会に向けた心のバリアフリーへの理解とともに、自分の生き方について考えを深める。
5 取組内容	(1) 「I'mPOSSIBLE」を活用した授業と「パラスポーツ体験ポッチャ」 体育で「I'mPOSSIBLE」を活用した授業を行った。生徒たちは、パラリンピックは多様性を認め、誰もが個性や能力を発揮し、活躍できる公共的な機会となっていることを知った。さらに、社会の中にあるバリアフリーをなくすことの必要性や発想の転換が必要であることを学んだ。そして、パラリンピックでは様々な種目が行われていることを知り、一番障がいがある人でもできるポッチャを体験してみたいという思いをもった。 <div style="background-color: #0056b3; color: white; padding: 5px; margin: 10px 0;"> 【生徒Aの学び】 人はみんな一緒。それぞれ個性はあるけど、上も下もない。だから、障がい者の人たちと共存していきたい。ポッチャを実際にやってみたい。 </div> まず、競技に必要なポッチャボールづくりを行った。生徒たちはうまく転がるように、形を整えながら、一つ一つ丁寧にボールを作った。 そして、3人でチームを組む「ガンマポッチャ2020」と題して、自分たちが作ったボールを使ってポッチャを体験した。生徒たちはジャックボール(目標



【ポッチャボールづくり】

球)に少しでも近づけようと、投げる強さや方向を考えながら、ボールを投げた。うまくボールをコントロールできなかったが、試行錯誤をくり返しながらか、競技を楽しむことができた。

【生徒Aの学び】

親指と中指と薬指に力を入れて投げると、コントロールしやすくなって目的とする位置に投げられた。(中略)ゲームをしていくなかで、正確な距離感、コントロールを身に付けて、その場その場に合った戦術で戦っていきたい。

生徒たちはボッチャを何回か体験するうちに、投げる順番や状況に応じてボールを置く位置などをチームで検討した。生徒たちはボッチャにのめり込んでいった。



【ゲーム後にふり返りをする生徒】

【生徒Aの学び】

最後に投げる人は、一発逆転を狙うために、正確な位置に投げることができる人がいい。(中略)1人の視点で作戦を立てるのではなく、チームのみんなでいろいろな視点で話し合っ、勝利への道を広げていきたい。

(2) 障がい者スポーツの可能性について学ぶ

生徒たちはボッチャ体験を通して、競技に対する興味や思いを高めることができた。次に、生徒たちの障がい者スポーツへの認識をさらに深めるために、日本福祉大学の安藤佳代子先生を講師としてお招きし、「障がい者スポーツの可能性」について、お話をしていただいた。



【日本福祉大学の安藤佳代子先生】

講演では、パラリンピックの魅力を以下のような内容で、生徒たちにわかりやすくお話をしていただいた。

パラリンピックの魅力とは？

- ① 乗り越えようとする **勇氣**
- ② 困難や限界があってもあきらめず突破しようとする **強い意志**
- ③ 人の心を揺さぶる **インスピレーション**
- ④ 多様性を認め、誰もが同じスタートラインに立てる **公平さ**

【生徒Aの学び】

パラリンピアン表情を見ていると、すてきな笑顔をしたり、人に対して優しい性格の人だったりしていた。だから、障がい者の人や高齢者とも、もっと関わっていききたい。障がい者に対して、自分が見たり知っていたりすることよりも、もっと広い世界があることがわかった。

(3) ボッチャ元日本代表による講話とボッチャ体験

ロンドン・パラリンピック、ボッチャ元日本代表である加藤啓太さんをお招きした。加藤さんは生後3か月で窒息というアクシデントに見舞われ、一命は取り留めたが、ほとんど体を動かすことができないという大きな後遺症を背負った。そんな加藤さんからは「新たな一歩！～今動き出す未来への可能性～」と題して、可能性を信じて勇気をもって挑戦することの大切さを、自分の体験談を交えながらユーモアたっぷりにお話していただいた。生徒たちは真剣なまなざしで、加藤さんの話を聞いていた。



【通訳の方を交えて加藤さんの講話】

講話の後、加藤さん1人（3球）VS 生徒12人（12球）という特別ルールでボッチャ対決をした。元日本代表との対決に生徒たちは心を躍らせながらプレーした。加藤さんがボッチャボールを転がすごとに、そのボールコントロールの正確さに大きな歓声が上がった。



【加藤さんとのボッチャ対決】



左の資料は、加藤さんが生徒たちにプレゼントするために書いてくれた色紙である。一字一字思いを込めて書かれたことばは、今の自分の状況を受け入れ、夢と希望をもって、周りに流されずに自分の信念を貫いてほしいという願いを強く感じさせるものであった。

【生徒Aの学び】

「1%の可能性」は、自分が思っているよりも大きいということを知った。私は自分ができるかも知れないことを、挑戦もせずにあきらめていた。だからこれからは、できるかわからないことも、一生懸命努力して、自分がよい方向へ成長していけるようにしたい。（中略）いろいろな人と会うことで可能性を広げることができると思うから、もっと人とのコミュニケーションを大事にしていきたい。過去は変えられないけど、未来は自分の力で変えられると思うから、よい方向に自分と自分の未来を変えていきたい。

加藤さんのように情熱をもって全力を尽くす姿から、講演に参加した生徒たちの一人一人の可能性の芽生えに期待し、生徒に自分の未来をデザインできるような進路を見つけさせたいと考えた。

6 主な成果	<p>ボッチャボールを自分たちで作り、体験する活動を行ったことで、ボッチャを身近なものとして捉えることができた。その上でパラリンピックに関わる人たちと出会ったことで、生徒たちの障がい者スポーツへの理解を深めることができた。さらに、パラリンピアン（障がい者）の見方・考え方、生き方についての講演を聞いたことで、今の自分と向き合い、これからの自分の未来や生き方について考えることができた。</p> <p>【生徒の感想】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 将来、障がい者の人をサポートする仕事をしてみたい。人助けをするのがとても好きなので興味をもてた。これから、障がい者の方とかかわっていききたい。 ・ 加藤さんからもらった色紙が、一番心に残った。生きる可能性が1%だった人が、字まで書いて私たちに大切なことを一生懸命言葉で伝えようとしている姿に勇気をもらった。私も夢に向かって挑戦していききたい。 ・ 自分は獣医になりたい。親には「難しいけど大丈夫？」と言われるけど、まだ「なれない」なんて決まったわけじゃないから、これから頑張りたい。
7 実践において工夫した点（事業の特色）	<ul style="list-style-type: none"> ・ パラリンピックやボッチャを身近に感じさせるために、それらの魅力について知る授業や体験を設けた。 ・ 生徒の考え（見方・考え方）を深めるために、障がい者スポーツを専門とする安藤佳代子先生、ロンドン・パラリンピックの元日本代表の加藤啓太さんからの講話・体験の場を設けた。
8 主な課題等	<p>今回学んだことを、これからの学校生活や進路選択にどうつなげていくかを、生徒たちに考えさせていきたい。</p>
9 来年度以降の実施予定	<p>オリンピック・パラリンピックについて、修学旅行での活動や来年度の生き方を考える会などで取り上げていきたい。</p>